



近畿大学
KINDAI UNIVERSITY

近畿大学水産研究所
白浜実験場(水産研究所本部)

〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町3153
TEL: (0739) 42-2625 Mail:ari@itp.kindai.ac.jp

近畿大学水産養殖種苗センター
白浜事業場(水産養殖種苗センター本部)

〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町1-5
TEL: (0739) 42-4800 Mail:atpc@itp.kindai.ac.jp

近畿大学水産研究所
近畿大学水産養殖種苗センター

Aquaculture Research Institute, Kindai University /
Aquaculture Technology and Production Center, Kindai University

海を耕せ



四方を海に囲まれた日本は、古来さまざまな海産物を食糧として利用してきた「海の国」。現在でも、国民一人あたりの魚消費量が世界ナンバーワンを誇る水産大国ですが、水産資源をめぐる問題は今、大きな岐路に立たされています。増え続ける人口で世界全体の食糧消費量が増大し、魚介類の乱獲が進む一方、工業発展のかたわら海洋汚染が進む地域も少なくありません。近畿大学水産研究所は、こうした水産資源の枯渇が懸念される状況に立ち向かい、養殖魚類を安定的に世界へ供給することをめざし、日夜研究に取り組んでいます。

乱獲が招いた 水産資源の 枯渇問題に 立ち向かう

養殖技術で世界を
牽引するトップランナー

地球と共生できる
養殖法の確立へ

近畿大学水産研究所は、戦後間もない1948年に「臨海研究所（現・白浜実験場）」を開設して以来、先進的な養殖法の研究により水産資源の増産と技術発展に寄与してきました。「獲る漁業から、つくり育てる漁業」への転換を果たしてきた当研究所の養殖法は、さらなる水産資源増産と持続的利用を実現する研究を推進していきます。

養殖技術を用いたさらなる水産資源の増産をめざすには、養殖現場そのものが自然と調和した場所でなければなりません。養殖法の研究とともに、養殖現場の環境改善もまた当研究所が取り組む大きなテーマの一つです。長年の研究で蓄積された地球にやさしい養殖技術を、世界へ提供していくことが当研究所の大きな使命でもあります。

海を耕せ！

戦後の食糧難を救った「海の畑」構想

今から約70年前の、第二次世界大戦直後。和歌山県をはじめとする全国の漁港では漁獲高が大幅に落ち込み、日本は深刻な食糧不足に陥っていました。その状況を懸念した近畿大学初代総長・世耕弘一は、島国・日本を囲み、目の前に広がっている海を「畑」と捉え「海を耕せ!」という理念を掲げて魚の養殖を試みはじめました。これが、近畿大学の養殖研究のはじまりでした。獲る漁業しかなかった当時、全く新しい形の漁業に、ほとんどの関係者は「海の畑」構想に半信半疑だったといえます。しかし、世耕弘一は漁業振興と水産資源の自給を目標に、後の養殖技術の基礎となる栽培漁業を唱え、実行していきました。そして、1948年、和歌山県白浜町に、最初の施設となる臨海研究所を誕生させました。

信念の実現に向け邁進した、養殖漁業への道

発足して間もない臨海研究所では、当時から世界初となるさまざまな研究が行われていました。その一方で、養殖法の確立という前例のなかった取り組みに、失敗の連続だったといえます。研究開発費が大学の財政を圧迫し続ける事態に、一時は研究撤退を提案する声もありました。しかし、提唱者・世耕弘一は決して信念を疑わず、積み重ねられた努力を形にするため研究活動を続行しました。その結果、関係者・研究者らの並々ならぬ努力によってハマチの養殖に成功し、さらにマダイ、カンパチなど高級魚の養殖法も確立。当研究所は、全国の漁業関係者から大きな注目を浴びることとなりました。



養殖技術の根幹となった「小割(網いけす)式養殖」

今日、15万トンにも及ぶ養殖ブリ類の生産を実現する背景には、こうした当研究所の試行錯誤がありました。養殖技術確立のために信頼できる研究者が必要だと考えた世耕弘一は、京都大学農学部まで足を運び、若き原田輝雄をスカウト。そして、養殖研究の成功を裏付ける大きな要因となったのが、のちに当研究所第2代所長となった原田輝雄による「小割(網いけす)式養殖」の実用化でした。それまでは、湾を仕切った養魚池で魚を放し飼いすることが行われていましたが、原田は「網いけす」を用いて小さく飼うことで効率的な養殖技術を開発したのです。その革新的な「小割(網いけす)式養殖」によって養殖技術は飛躍的に向上し、広く世界の養殖技術の主流となったのです。



近畿大学初代総長・世耕弘一は、この言葉を理念に掲げ、世界に先駆けて養殖技術を研究する「近畿大学水産研究所」を誕生させました。以来、いくつもの世界初となる成果を生み出し、世界トップの養殖技術を持つ研究機関として常に世界をリードしています。

近畿大学創設者 近畿大学初代総長
世耕弘一(新宮市名誉市民)

養殖研究

世界から注目を浴びる、 近畿大学水産研究所の養殖研究

当研究所はこれまで数々の世界初となる研究成果を積み重ね、水産業界から厚い信頼を得てきました。その技術は世界各国から注目され、さらなる技術発展のため、現在では国内に7つの実験場で構成されています。

世界初となる 研究成果を多数発表

一連の研究活動によって生み出された画期的な成果は、すみやかに今日の養殖産業に導入され、水産資源の増産に生かされています。その主な成果事例としては、次のものが挙げられます。

1954年から「小割（網いけす）式養殖法」の研究に着手し、産業化を実現。今日の日本ではこの方式が海産魚養殖の主流であり、世界へも普及しています。

1965年には、世界で初めてヒラメの種苗生産に成功し、現在までに多くの魚種で種苗生産を実現しました。さらに、選抜や交雑による優良品種の開発にも成果を挙げています。

2002年には、念願だったクロマグロの完全養殖に世界で初めて成功しました。

また、新たなテーマとして、富山実験場において深層水を利用した増養殖研究や奄美実験場において暖海性魚類の種苗生産などにも取り組んでいます。

養殖学を牽引する 水産資源研究の 一大拠点へ

水産研究所では、実際に魚類を飼育しながら栄養学、育種学、形態学、生理・生化学、魚病学などの基礎的研究に加えて、種苗生産、交雑、選抜、バイオテクノロジー、代替タンパク源などの応用面にもわたる総合的な研究活動を行っています。継続的にこれらの養殖学を追究している点は、他に類をみない当研究所最大の特徴といえます。

1989年以降、タイのチュラロンコン大学をはじめ学術協定を締結しているマレーシアのサバ大学、韓国の全南大学校との間で、研究員や学生を相互に派遣して研修活動を行うなど、国際交流にも積極的に取り組んできました。

また、文部科学省から、2003年には21世紀COEプログラム「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」、2008年にはグローバルCOEプログラム「クロマグロ等の養殖科学の国際教育研究拠点」に連続して選定されました。



養殖
Aquaculture
研究

学問の垣根をこえて 広がる水産研究の未来

養殖業発展の礎となる多くの業績を挙げてきた当研究所。野生の海水魚を飼い馴らして養殖種に改良し、産卵親魚の養成に成功したことも大きな成果の一つです。その背景には生産のための実践的研究が行われ、養殖技術の向上に努めたことにあります。近年では、魚類栄養学、育種学、形態学、生理・生化学、魚病学などの基礎学問にも重点を置き、養殖学へのより幅広い応用を試みてきました。水産研究所では、今後も学問領域をこえた連携を行うことで、新たな養殖技術の開発を行っていきます。

近畿大学水産研究所の主な成果・実績

- 1950年 和歌山県白浜町において第一養殖場の使用を開始
- 1954年 「網いけす(小割)式養殖」の研究に着手
- 1964年 マダイの選抜育種研究に着手
- 1964年 交雑育種研究に着手
- 1970年 水産庁の委託を受け、マグロ養殖の研究を開始
- 1979年 世界初のクロマグロの人工ふ化、種苗生産に成功
- 1995年 人工ふ化クロマグロの世界初放流
- 2002年 クロマグロの完全養殖に成功
- 2004年 完全養殖クロマグロを初出荷
- 2017年 クロマグロの配合飼料を実用化(2021年までに完全移行)



ヒラメ・ブリなど 多くの魚種の 人工ふ化・種苗生産を 実現

当研究所では、1965年に世界で初めてヒラメの人工ふ化による種苗生産を実現。そして今日までに多くの魚種の種苗生産(世界初)に成功しています。この成果により、天然魚の乱獲による水産資源の枯渇を防ぐとともに、希少種の大量生産が可能となったことで安価な高級魚の流通を実現しました。

獲る漁業から、育てる漁業へ。将来予測される食糧難に備え「海を耕し、資源を求める」という未来へのビジョンは確かな成果として、実を結んでいます。

近畿大学が世界で初めて人工ふ化から種苗生産に成功した魚種

年	魚種
1965	ヒラメ
1967	ヘダイ・イシダイ
1968	ブリ
1969	カンパチ
1970	イシガキダイ・キハダ
1972	ヒラマサ・マルソウダ・ヒラソウダ
1973	ハガツオ・イサキ・シマアジ
1975	シロギス
1979	クロマグロ
1980	
1990	マイワシ
1991	
1999	マサバ
2000	

養殖
Aquaculture
研究

世界の水産資源持続へと寄与する クロマグロ完全養殖の夢を実現

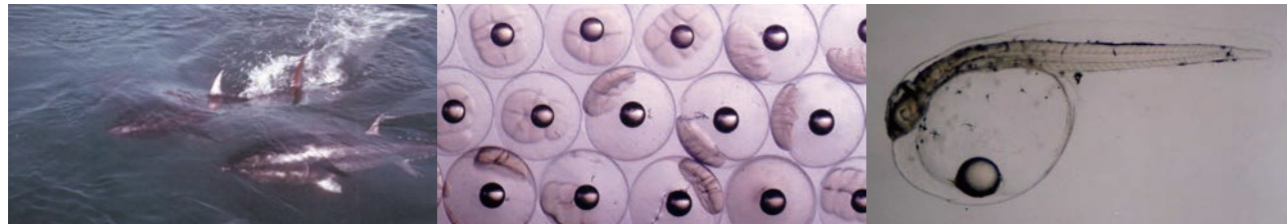
有用魚類の飼育技術研究から、養殖産業の発展へ。
実学の精神に則り、魚類の完全養殖を通じて、社会に貢献できる技術の形成に取り組んでいます。

マグロ資源の 枯渇問題を解消する 完全養殖

クロマグロはマグロのなかでも最大の魚種で、大きいものでは全長3m・体重500kgまで成長します。マグロ種の中でも最も味が良いとされ、高値で取引されているため、近年は乱獲により個体数の減少がみられます。今日ではその対策として世界的に捕獲量の削減措置がとられていますが、もう一つの対策として養殖クロマグロの生産が挙げられます。しかし、一般のクロマグロ養殖では天然の稚魚を捕獲して育てたものであり、稚魚の乱獲が進めばやがて養殖魚も減少してしまいます。こうした厳しい環境の中でクロマグロの供給を維持していくためには「完全養殖」の技術を確立することが求められてきました。

完全養殖は、人工ふ化した仔魚を親魚まで育て、その親魚から採卵し、人工ふ化させて次の世代を生み出していく技術です。これにより、天然資源に頼らず、すべてのプロセスを人工飼育することができ、市場へ安定的に供給することが可能になります。

完全養殖クロマグロの成長過程



1 親魚

5年以上飼育して親魚とします。全長2m、体重200kg以上に成長します。

2 受精卵

受精した卵は水面に浮上し、それを採集します。直径約1mmで、1尾の雌から数百万粒の卵が採れると推定されています。

3 ふ化仔魚

およそ32時間でふ化します。ふ化直後の仔魚は全長約2~3mmで、最初にプランクトンを餌に育てます。



4 稚魚

ふ化から40日前後の頃に陸上の水槽から海上の網いけすに移されます。



5 若魚

ふ化から約3カ月で全長約30cm、体重約300gに成長します。



6 成魚

約3年で全長1m、体重30kg以上の成魚となり、一部が出荷されるようになります。

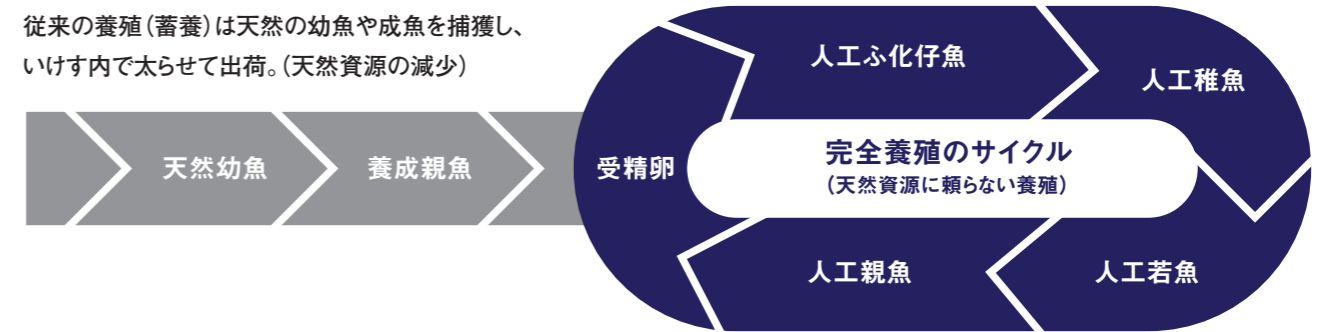
徹底した観察により 32年目に課題をクリア



近畿大学水産研究所は、1970年にクロマグロの完全養殖に向け研究に着手。そして32年の歳月を経た2002年6月に成功しました。これほど長期間に渡ったのは、クロマグロがデリケートな魚であり、研究されるまでその生態もよく知られていなかったためです。完全養殖を成功させた鍵は、クロマグロを徹底して観察したことにありました。例えば、成育の過程で人工ふ化した稚魚が突然死することがあり、その要因を何度も観察することで原因を究明していきました。クロマグロに適切な飼育環境を見出すまでさまざまな対策を講じ、やがて成魚に育て上げた個体から産卵があり、ついに完全養殖を達成しました。これは画期的な成果であり、日本のみならず国際的な養殖事業において核心をなす技術となったことから、以後の継続研究が文部科学省の21世紀COEプログラムやグローバルCOEプログラムの拠点に採択されました。当研究所では、今後研究をさらに進め、クロマグロをはじめ有用魚の養殖技術の向上をめざしていきます。

完全養殖のサイクル

従来の養殖(蓄養)は天然の幼魚や成魚を捕獲し、いけす内で太らせて出荷。(天然資源の減少)



TOPICS 世界へ誇る魚類養殖学研究の最先端へ

文部科学省が進める研究プログラムに採択

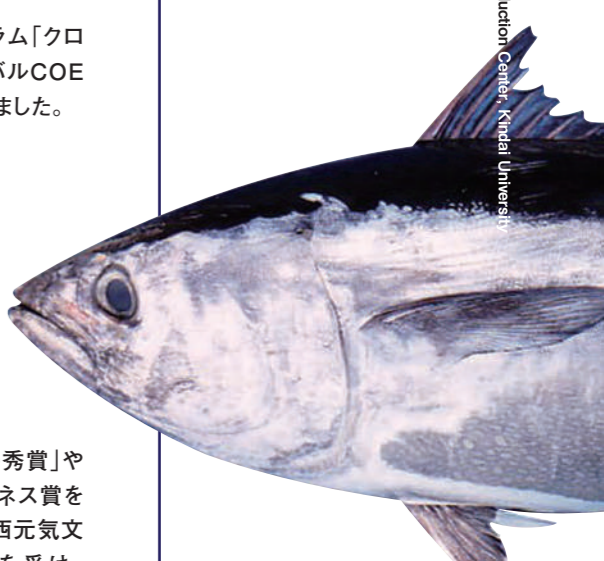
世界的研究教育拠点形成のため、2003年(平成15年)に21世紀COEプログラム「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」に、2008年(平成20年)にはグローバルCOEプログラム「クロマグロ等の養殖科学の国際教育研究拠点」に連続して採択されました。

世界中のメディアに紹介

クロマグロの完全養殖の取り組みは2002年の成功以来、ニューヨークタイムズをはじめ、国内外の多くのメディアでその成果について紹介されています。さらにはクロマグロの漁獲制限が社会問題化した2006年以降、この研究はとりわけ注目されています。また、水産研究所の成果を発信する養殖魚専門料理店をオープンした2013年には、年間100本以上のテレビ番組で取り上げられ、そのジャンルは報道、教育、バラエティなど多岐に渡りました。

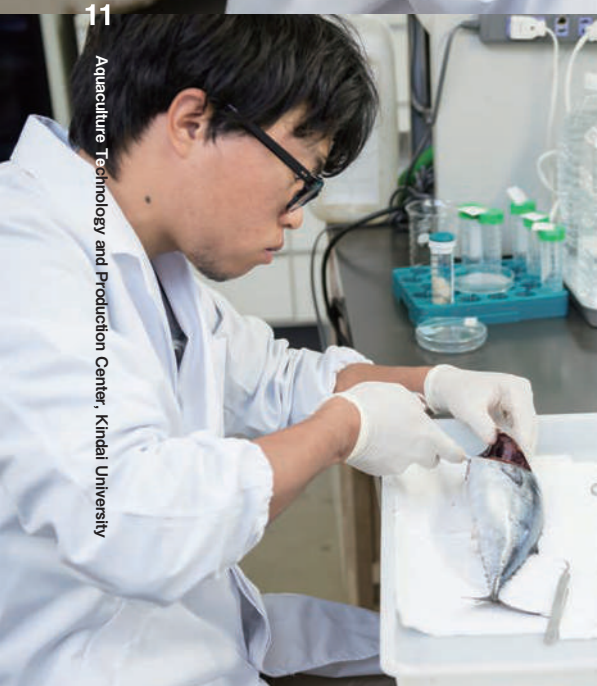
各種ビジネス賞を受賞

「クロマグロ完全養殖の技術開発」において「平成17年度ニュービジネス大賞 優秀賞」や「2005年日経優秀製品・サービス賞 優秀賞日経産業新聞賞」など、多くのビジネス賞を受賞しました。さらに、2010年は「第3回海洋立国推進功労者賞」、2011年は「関西元気文化園賞特別賞」、そして養殖魚専門料理店を大阪と東京に出店したことを受け、2013年に再度「日経優秀製品・サービス賞」を受賞しました。また、同店舗を運営する近畿大学および大学発ベンチャー・株式会社アーマリン近大は「関西財界セミナー賞 2014特別賞」を受賞し、各界からの注目を集めつつあります。



養殖
Aquaculture
研究

品種改良



**水産業界の発展を使命とし、
新たな優良品種を市場へ提供する**

完全養殖の成果を生かし、より優れた品種を誕生させる技術を推進。現在では高級魚の安価な流通にも貢献し、当研究所の技術は確かに社会へと還元されています。



大学と社会が 両輪となって 研究成果を活用する



近畿大学が建学の精神として掲げる「実学」とは、学問の成果を世の中へ生かし、大学と社会にとっての利益へとつなげること。研究活動のみにとどまらず、産学連携によるさらなる発展に近畿大学の真価があります。水産研究分野では、人工ふ化に成功した魚の種苗を養殖業者に提供することによって、従来高価であったマダイやシマアジなどの高級魚の安定供給に成功するとともに、供給量の飛躍的な向上にもつながりました。

その後、ブリ属の品種改良の一環として、ブリより商品価値の高いヒラマサとの交雑種であるブリヒラ（ブリ雌×ヒラマサ雄）が1970年に誕生。ブリヒラの成長はブリより遅いものの、2歳魚でヒラマサの2倍になるため、市場に流通した実績があります。

より美しい養殖魚への 挑戦

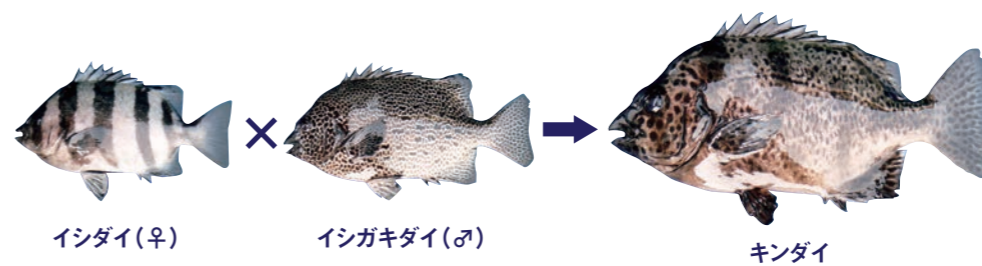


ブリヒラの他に市場へ流通した実績がある交雑種として、マチダイ（マダイ雌×チダイ雄）があります。

マダイの天然魚は鮮やかな赤色を帯びていますが、養殖魚は紫外線による日焼けによって黒化してイメージを損なっていました。一方、チダイは成長が遅いものの、養殖しても赤色がほとんど失われない特徴があります。そこで両魚を交配することによって、天然魚のような赤色を帯び、チダイよりも成長の早い形質を備えたマチダイが生まれ出されました。しかし、体表が傷つきやすいなどの問題解消のためにマダイとマチダイを交配させた「マチ戻し」は、従来のマチダイより優れた形質を備えています。こうした経済市場価値を見据えた研究を行うことも「実学」を掲げる近畿大学の大きな特徴です。

交雑

異なる魚種の特質を受け継ぐ交雑魚の研究を行い、1964年に初めての交雑種となるマダイ（雌）とクロダイ（雄）の交配に成功し、その後数多くの組み合わせによる交雑種を作出しています。



年	交雑の組み合わせ(♀)×(♂)
1964	マダイ×クロダイ
1967	マダイ×ヘダイ
1968	インダイ×クロダイ
1969	インダイ×インシガキダイ
1970	ブリ×ヒラマサ
1970	ブリ×カンパチ
1970	インダイ×メジナ
1970	クロダイ×ヘダイ
1971	カンパチ×ヒラマサ
1972	ヒラマサ×カンパチ
1973	マダイ×チダイ
1973	インシガキダイ×インダイ
1976	ヒラソウダ×スマ
1998	マツカワ×ホシガレイ
1998	ホシガレイ×マツカワ
1998	ヤイトハタ×ク
1998	ヤイトハタ×マハタ
2011	ク × エ×タマカイ

選抜



優れた形質をもつ稚魚を選んで育て、その中からさらに優れたものを選ぶことを繰り返して優良品種を作り出す方法で、成長面で天然魚よりはるかに優れた「近大マダイ」（商標登録済）が誕生しています。

バイオテクノロジー

マダイのクローン魚やヒラメの雌化、トラフグの雄化に成功したほか、DNA解析に関する研究などを行っています。

品種改良

Product improvement

水産研究所



養殖技術をリードする 水産科学の研究拠点

世界の養殖研究をリードする存在として各地に近畿大学水産研究所のネットワークが整備されています。

水産養殖 種苗センター

種苗生産の最前線

地元との協力体制のもとに、優良種苗の生産、および高品質の成魚の養成に日々取り組んでいます。



白浜実験場(水産研究所本部)

養殖研究の成果を水産業界へ積極的に発信

1948年に近畿大学の前身である大阪理科大学の臨海研究所として開設。最初にハマチの養殖試験を開始するとともに、小割(網いけす)式養殖法を開発しました。この養殖法はやがて爆発的に普及し、現在ではわが国のみならず世界中に普及しています。また、マダイをはじめ多くの有用魚類の養殖技術を開発。育てた親から採卵し、仔稚魚を育成するいわゆる完全養殖の研究を進めてきました。さらには、選抜や交雑、バイオテクノロジー等による品種改良の研究にも取り組んでいます。



1970年白浜町坂田に有用な水産種苗の生産を基礎におく水産養殖種苗センターを設立し、その後施設を拡充してきました。水産研究所が培ってきた養殖技術を

産業化し、地元はもとより広く日本の水産業と食糧の供給に貢献すべく様々な魚種の稚魚および成魚の生産事業に取り組んでいます。



すさみ分室

飼育用卵の供給基地

1986年に開設した本施設は、近隣に養殖場がないことから清浄な海水を利用できる立地条件を生かし、各種養殖用種苗の大量生産を行うとともに、大型の採卵用水槽を複数備えて飼育用卵の供給基地としての役割も担当しています。



大島実験場

クロマグロ研究の最前線

本州最南端串本町大島に位置し、温帯・亜熱帯性魚類養殖研究を目的として1970年に開設されました。開設当初からクロマグロの養殖研究が行われ、2004年には完全養殖クロマグロを初出荷するといった成果を収めています。



浦神実験場

初期飼育、栄養学を重点研究

1950年代後半から紀南においても真珠養殖から魚類養殖への転換が叫ばれ、地元の強い要請によって1960年に開設。種苗生産、初期発育、栄養要求などに関する研究を精力的に行い、紀南地方の魚類養殖の発展に大きく貢献しています。



新宮実験場

唯一の淡水魚養殖の研究施設

淡水魚類の養殖研究を目的とする実験場として三重県御浜町下市木に開設された後、1974年、新宮市高田地区の要望もあって、熊野川の支流である高田川のほとりに移転。清らかな高田川の河川水を利用してアユ、アマゴ、チョウザメの養殖研究に取り組んでいます。



富山実験場

深層水を利用した養殖研究

温帯、冷水性魚類養殖研究を目的として1991年に開設。開設当初から水深100mの深層水を利用した養殖研究が行われています。近年では、サクラマスやマアノゴの養殖研究に取り組んでいます。



奄美実験場

クロマグロの大量種苗生産の促進

地元からの要請を受け、和歌山県の大島実験場からクロマグロ幼魚を輸送して飼育実験を開始し、2001年に開設。マダイ、シマアジ、ハタ類等の中間育成を実施。陸上におけるクロマグロの種苗生産研究にも取り組んでいます。

白浜事業場(水産養殖種苗センター本部)

代表的な生産対象魚種: マダイ、シマアジ、イシダイ類、ヒラメ等

すさみ事業場

代表的な生産対象魚種: マダイ、ブリ類、トラフグ、ハタ類等

浦神事業場

代表的な生産対象魚種: マダイ、シマアジ、イサキ、ブリ類等

大島事業場

代表的な生産対象魚種: マダイ、シマアジ、ブリ類、クロマグロ等

奄美事業場

代表的な生産対象魚種: クロマグロ、マダイ、シマアジ、カンパチ等

東南アジア事業場

代表的な生産対象魚種: 南方系ハタ類、ナポレオンフィッシュ、その他交雑魚等



世界的な水産研究をバックアップする 近畿大学の豊かな知的財産

これまでに数々の「世界初」を生み出してきた水産研究所。国内各地の実験場が連携し、常に最先端の業績を発表しています。



近畿大学本部

〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1 TEL: (06) 6721-2332 (代表)

ホームページ <https://www.kindai.ac.jp>

水産研究所奄美実験場
種苗センター奄美事業場



水産研究所

白浜実験場 (水産研究所本部)	〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町3153 TEL: (0739) 42-2625 FAX: (0739) 42-2634
すさみ分室	〒649-2621 和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見4578-1 TEL: (0739) 55-4101 FAX: (0739) 55-4102
大島実験場	〒649-3633 和歌山県東牟婁郡串本町大島1790-4 TEL: (0735) 65-0501 FAX: (0735) 65-0974
浦神実験場	〒649-5145 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町浦神468-3 TEL: (0735) 58-0116 FAX: (0735) 58-1246
新宮実験場	〒647-1101 和歌山県新宮市高田1330 TEL: (0735) 29-0001 FAX: (0735) 29-0147
富山実験場	〒933-0222 富山県射水市海竜町3番 TEL: (0766) 86-2111 FAX: (0766) 86-2772
奄美実験場	〒894-1853 鹿児島県大島郡瀬戸内町花天137 TEL: (0997) 73-6770 FAX: (0997) 73-6777

水産養殖種苗センター

白浜事業場 (水産養殖種苗センター本部)	〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町1-5 TEL: (0739) 42-4800 FAX: (0739) 42-4806
浦神事業場	〒649-5145 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町浦神604-12 TEL: (0735) 58-1501 FAX: (0735) 58-1502

すさみ・大島・奄美事業場の事務所所在地は実験場と同じ

株式会社 アーマリン 近大

安心と美味しさを、食卓に。

株式会社アーマリン近大は、60年あまりの歴史をもつ近畿大学水産研究所が独自の水産養殖技術により、卵から成魚まで一貫した管理体制と、薬に頼らないストレスフリーな環境により育てられた優良な魚を、「安全」で「安心」さらに「美味しさの探求」にこだわった魚として広く消費者に販売することを目的に設立しました。

マダイ、シマアジ、カンパチ、クロマグロなどの成魚、稚魚のほか、「くえ鍋セット」や「近大キャビア」といった加工商品も販売。「アーマリン近大」とはアルファベットの最初の文字であり、常に水産増養殖の分野で先頭を行く開拓者であるという決意と、安全・安心の頭文字であるA（アー）、海を意味する（マリン）、近畿大学の略称である（近大）を組み合わせたものです。



大阪店



「実学」の精神を体現し、
次なる研究に生かしたい

近大卒の魚と紀州の恵み

商号 株式会社アーマリン近大

設立 2003年2月19日

資本金 5,250万円

事業内容 ①養殖用種苗及び成魚の海面養殖事業
②養殖用種苗、成魚、加工品の販売
③養殖魚専門料理店（飲食店）の経営

代表者 代表取締役社長 遠 浩康

本社所在地 〒649-2211
和歌山県西牟婁郡白浜町1番地の5
TEL: (0739) 42-4116

稚魚の販売

日本各地の養殖業者の方々に優れた稚魚を出荷し、水産養殖業界の発展をめざしています。それらはいずれも近畿大学で生産された稚魚で、出荷先から高い評価を頂いています。

成魚の販売

株式会社アーマリン近大が提供する養殖魚は、近畿大学が培ってきた養殖技術を駆使し、独自のカリキュラムをクリアして出荷（卒業）したものです。魚たちにとって最適な育成環境を整え、心を込めて育てられています。近畿大学の魚の安全で安心な品質が評価され、世界中から食材としての需要が高まっています。

沿革

- 2003年02月 近畿大学のベンチャー企業として株式会社アーマリン近大を設立
当初資本金は5万円
新事業創出促進法の最低資本金規制特例による認可・和歌山県事務局田辺支局第1号
- 2004年09月 完全養殖クロマグロを初出荷
- 2006年03月 「近大マグロ」「近大マダイ」「近大クエ」商標登録
- 2007年01月 新株発行により資本金1,000万円に
- 2007年04月 米国に「近大マグロ」を初出荷
- 2007年12月 養殖用完全養殖クロマグロ稚魚を初出荷
- 2010年09月 豊田通商株式会社とのクロマグロ養殖事業における協業事業開始
- 2011年04月 須賀利漁場（三重県尾鷲市）の漁業権を取得
- 2013年02月 新株発行により資本金5,250万円に
- 2013年04月 グランフロント大阪に「近大卒の魚と紀州の恵み 近畿大学水産研究所」開店
- 2013年09月 大島漁場（和歌山県串本町）、花天漁場（鹿児島県奄美大島）の漁業権を取得
- 2013年12月 銀座コリドー通りに「近大卒の魚と紀州の恵み 近畿大学水産研究所銀座店」開店
- 2014年04月 浦神漁場（和歌山県那智勝浦町）の漁業権を取得
- 2014年11月 株式会社ソナドリーム五島（豊田通商）が養殖したクロマグロを「近大マグロ」に認定
- 2015年04月 戸津井漁場（和歌山県由良町）の漁業権を取得
- 2015年07月 「近大ブリ」商標登録
- 2018年02月 「SCSA」認証取得 取得魚種：マダイ、シマアジ、ブリ属、クロマグロ
- 2018年09月 白浜漁場（和歌山県白浜町）の漁業権を取得
- 2019年03月 株式会社ソナドリーム沖繩（豊田通商）が養殖したクロマグロを「近大マグロ」に認定
- 2020年08月 JR東京駅構内に「近畿大学水産研究所 はなれ グランスタ東京店」開店

クロマグロをはじめとする天然資源の減少がますます危惧される中、水産養殖のパイオニアである近畿大学が、率先して養殖魚の価値を向上させるために、養殖魚専門料理店「近大卒の魚と紀州の恵み 近畿大学水産研究所」を大阪と東京に出店しました。本学が研究し育てた安全で安心、そして美味しい養殖魚を味わい、養殖魚の魅力を感じていただける貴重な場として、開店以来、多くのお客様に好評を得ています。

また、近畿大学の学生がメニューの考案や食器制作に参加するなど、本学の建学の精神である「実学教育」を具現化する場として、さらにはお客様からのご意見やご感想を研究現場にフィードバックし、次の研究に生かす場としてもこの店舗を活用しています。



銀座店



はなれ グランスタ東京店

大阪店

〒530-0011 大阪市北区大深町3番1号
グランフロント大阪ナレッジキャピタル6階
TEL: (06) 6485-7103

席数 93席(66.2坪)
営業時間 ・ランチ11:00～15:00 (L.O.14:00)
・ディナー17:00～23:00 (L.O.22:00)
※食材が無くなった場合、営業を終了させていただくことがあります。
定休日 入居施設に準ずる

銀座店

〒104-0061 東京都中央区銀座6丁目2番先
東京高速道路山下ビル2階（銀座コリドー通り）
TEL: (03) 6228-5863

席数 57席(57.44坪)
営業時間 ・ランチ11:30～15:00 (L.O.14:00)
・ディナー17:00～23:00 (L.O.22:00)
※食材が無くなった場合、営業を終了させていただくことがあります。
定休日 不定休(年末年始休業)

はなれ グランスタ東京店

〒100-0005 東京都中央区丸の内1丁目9番1号
東京駅構内グランスタ東京1階
TEL: (03) 6259-1096

席数 24席(18.2坪)
営業時間 8:00～22:30 (L.O.22:00)
※食材が無くなった場合、営業を終了させていただくことがあります。
定休日 なし